

〔PBLの風と土 第17回〕

地に吹く風と土に寄せる波が境を越える

山口 洋典（立命館大学共通教育推進機構教授）

【前回までのおさらい】

筆者は2017年度にデンマークのオールボー大学（AAU）で学外研究の機会を得ました。AAUでは1974年の開学当初から全学でPBL（Problem-Based Learning）を導入していることで知られています。

連載1年目は現地報告を中心に、連載2年目はアイルランドで刊行されたPBLの書籍をもとにオールボー大学以外での知見を紐解きました。連載3年目からはサービス・ラーニングとの比較を重ねてきており、コロナ禍を経た連載4年目にはフィールドに赴くことが抑えられた影響を過去の受講生の語りを手がかりに検討しました。

1. コロナ禍における連載5年目にあたり

地域参加型学習の教育法の1つであるサービス・ラーニングを導入したカリキュラムの企画・開発・推進・評価に取り組んできた経験を踏まえ、より広い分野での参加型学習の手法として展開されてきたPBLについて比較研究から迫ることとしたのが2017年である。立命館大学の学外研究制度により、オールボー大学人文科学部の心理学科にて客員研究員として、デンマークの北部のまちに1年間滞在する機会を得た。そうした中で執筆の機会を得た本連載では、1974年の開学から全ての学部でPBLを導入してきた歴史的側面、さらにはUNESCOのUNITWIN/チェアプログラムに選定されたことでPBLの普及と研究に取り組んできている社会的・文化的側面を紹介させていただくことができた。あれから4年、連載も5年目となるのが感慨深い。

前述のとおり、連載1年目はオールボー大学の滞在記という性格も重ね、文献の渉猟を通じたサービス・ラーニングとの比較だけでなく、現地で実施されているセミナーの様子や客員研究員の受入担当教員となっていた先生方と共に発表した国際学会（PBL2018）の様子も紹介した。連載2年目は、PBL2018にて出会ったアイルランドの研究者によるPBLに関するオンライン書籍を解題していくこととした。3年目は、改めてサービス・ラーニングとの比較を通じて、PBLの2つの性格、つまりProblem-Based Learningとして社会課題への介入を通

じて知識や態度を磨いていくものとProject-Based Learningとして社会課題に介入していくもの、両者の観点の違いに関心を向けていった。そしてコロナ禍に見舞われた4年目は、コロナ禍によってサービス・ラーニング科目にどのような影響がもたらされたか、東日本大震災から10年という契機ということも相まって、一方で地域と大学とを頻りに往復して知識・能力・態度を磨いた結果、どのような学びと成長がもたらされたのかについて4人の卒業生の現在から検討することとした。

長引くコロナ禍は、参加型学習の展開にも大きな影響をもたらしている。PBLであれば、Problem-BasedであってもProject-Basedであっても、オンラインでのコラボレーションを通じて、社会的・専門的な素養を磨いていくことができるだろう。一方で、ソーシャル・ディスタンスングとして、人との距離感を調整することが求められる環境におけるサービス・ラーニングでは、現場での実体験を直接的に重ねること困難である。無論、急激な環境変化に適応しなければならないからこそ、インターネットを介した対人援助が必要とされる部分があるものの、そうした実践を学習環境の整備と共に行うのは簡単なことではない。

そうした中、前回の結語にも示したとおり、よりよい学習環境の創造のためにはコロナ禍での経験を忘れ去ることなく過ごすことが重要と捉え、連載5年目はより深い学びの場づくりの設計概念を検討していく。今回は越境をキー

ワードとして取り上げたい。言うまでも無く、ソーシャル・ディスタンスングの上で改めて困難さと重要さが際立った観点である。具体的には、連載4年目において積極的に取り上げてきた復興支援活動を組み込んだサービス・ラーニングの受講生の語りを手がかりに、地域参加型の学習において他者との物理的・心理的な距離感をいかにして調整するか、という点に着目していく。

2. 第三者の介在による相互評価の促進

サービス・ラーニングのみならず、フィールドワークを伴う実践的な教育プログラムにおいては、教室・実験室等の大学内で完結するプログラムに比べ、評価の観点・指標は複雑なものとなる。山口・河井(2016)では、「活動や学生集団を画一的に捉え、典型的で機械的な学びと成長を想定する評価では、学習評価としても実践評価としても掬い取れない事態が数多くある」として、「学習評価にも実践評価にも、活動の多様性と学びのコミュニティとしての学習者集団における多様性を重視すること、学びにおいても実践においても典型性の束縛を緩め非典型性を受け入れること、さらに活動が進展していく中での学びと実践の双方において生じる柔軟性を価値あるものとして捉えることが必要になる」ことを明らかにした。その際にデータとして特に着目したのが、プログラムの終了直前に行う学生の相互評価シートであった。¹謙虚で誠実に地域課題に向き合った学生が、場合によっては他の受講生に比して自己肯定感が低いように受け止められる際、一定期間にわたって学びのコミュニティの創出・維持・発展にあたってきた受講生どうしがコメントを重ねることによって、謙虚さと誠実さは携えつつ、成熟した市民としての素養を磨くことができたことに一定の自覚と、今後もそうした姿勢で地域社会に向き合っていく責任を喚起する契機となったことを確認したものである。

2021年5月23日、日本・サービス・ラーニング・ネットワーク(JSLN)の2021年度の全国フォーラムの第1分科会として「東日本大震災10年へのリフレクション～風の人から土の人となったサービス・ラーニング受講生と共に」が開催された。筆者がコーディネーターとなり、本連載の14

回目から16回目までに取り上げてきた立命館大学サービスラーニングセンター科目「シチズンシップ・スタディーズI」の減災×学びプロジェクト(以下「減災P」)の受講生、西崎芽衣(一般社団法人ならはみらい)、森亮太(MOGRA/グラフィックデザイナー)、森雄一郎(一般社団法人ならはみらい)を報告者として招き、改めて実践と学習の成果を相互に語り合う機会としたのである。開催案内には、第15回で紹介したとおり、立命館大学校友会・立命館災害復興支援室作成が2020年に作成した映像(「そよ風届け隊」×「チャレンジ、ふくしま塾。」)4人の校友が語る福島の復興)の事前視聴を促した。また、事前に名前は掲げなかったものの、この3人の報告者に加えて「ほか」という2文字を付して告知をしており、後述するように3名の語りに対して、分科会の終了直前に2名からコメントを寄せいただくこととした。

1時間半にわたるオンライン(Zoom)でのセッションでは、福島県楡葉町に居住する3人から簡単な自己紹介の上で受講のきっかけと印象的なエピソードを交えて何を学んだかについて語られた。まず、2012年に理工学部(機械工学科)の4年次において履修し、現在はフリーのグラフィックデザイナーという立場に加えて楡葉町の地域おこし協力隊や復興庁による実践型インターンシップのコーディネーターも務めている森亮太さんからは「現地に行って学ぶというプログラムに魅力を感じて受講した。何を学んだか、と言われると難しいけど、人との関わり方を学んだことは確かだ、今、福島で暮らしている基本的なベースとなるものを、この授業で学んだ気がするけど、なかなか言語化できていない。」と示された。続いて、同じく2012年度に産業社会学部(メディア社会専攻)の1年次において受講し、同年に森亮太さんが立ち上げた「そよ風届け隊」の設立メンバーでもある西崎芽衣さんは、「震災当時、報道を見て、自分も記者になりたいという夢を抱いて、入学したら何らかの形で地域の現状を見たいという機会を探しているとき、山口先生の大講義を受講したときに案内を見た。ボランティアサークルで現地に行くこともできたが、授業を通じて過去のその他の災害との比較をしながら学ぶということに魅力を感じて受講し、今、地



図1：JSLN第1分科会での話題提供の様子
(話題提供者のみZoomの「ピン止め」を用いて表示)

域で生きていく中で、社会で生きていく中で基本的に大切なことを学んだ。」と述べた。そして2015年に法学部（国際法務特修）の2年次で受講し、現在は榎葉町役場によって設立された一般社団法人ならはみらいで西崎さんと共に勤務する森雄一朗さんは「群馬県大泉町出身で、一度、地元の銀行に就職したが、榎葉町のまちづくり会社に転職した。人見知りということもあったので大学1年次に、なかなか友達ができず、これからどうしていったらいいかと悩んでいるときに、議員インターンシップに行き、将来の夢を語る機会に向き合い、これから人と出会い、人と向き合っていくことが大事だと考えていた頃、ボランティア活動を組み込んだ授業があることに知った。」と語った上で、当時の志望理由を手元に残していたことに触れ「誇張もあるかもしれないが、生まれが阪神・淡路大震災の年など、過去の災害を引きつけて述べていた」ことを紹介した上で、「新潟県中越地震で大きな被害を受けた塩谷集落での田植えや、榎葉でのインタビュー活動などで、自分たちがやっていることってボランティアって言うのか、地域の課題解決につながっているのか、ということを考え、むしろ現地の方の負担感や時間のロスになっていないか、と思い、受講生どうしで語ったこともある。」とエピソードが紹介された。

2順目の発言は、随時参加者から問いを受け付けていたこともあって寄せられた「授業で現地に行くことの意義」について応える形で、森亮太さんからの「既にあるボランティアサークルで活動していたら、今3人がここにいることはなかったらどうだろう。」の回答に始まり、「授業をきっかけに原子力災害で双葉郡から避難して

いる方々に直接触れて、現地の学生との出会いもあって「そよ風届け隊」という団体は立ち上がり、活動内容の組み立ては甘いところがあったのに、福島の方々はやさしくて「京都から来てくれるなら」と、多くの支えをいただいた。つながりのない中で多くの方と活動をつくっていった先に、今の私たちがいると思っている。」と述べた。続いて、西崎さんは「その後、サークルでの活動と授業で現地に来る人たちが混ざり、授業によるオフィシャルなプログラム以外でも多くの人が現地に関わり続けることで、結果として地域に根ざすことの意義を見つめることができたと思っている。また「そよ風届け隊」のメンバーには大学を休学して現地に行くという選択をした人がいて、自分もその一人で2015年度に1年間「ならはみらい」の臨時職員として休学して働いたが、1年間住む中で、福島を取り上げるメディアに接する中で、その姿勢に疑問が強くなっていった。そして、メディア系への進路は断つことにした。」と語った。そして森雄一朗さんからは次のような回答が示された。「国際法務の中でも行政学が専門だった。豪雪地帯の集団移転というテーマでディベートを行ったりもした。そこで、ゼミの同級生が「コストがかかるんだから集団移転をしたらいいじゃん」と言っていたが、減災×学びプロジェクトで出会った人に「集団移転をしてみよう」ということは難しいと体感した。一方で、学問上、集団移転ということを扱い、学んでいる人が今後、行政で働いていくということの思うと、実体験を持っていることによって気づきを大事にしたい、と思った。」

こうして過去の活動と学習の体験が語られる中で、受講後にサークルを立ち上げ、またサークルで活動を続けていったことに関心が寄せられ、参加者からはなぜ、そうして丁寧に現地に関わり続けるのか、「当事者意識の醸成」について問いかけがなされた。それに対しては、「大事なことは自分たちの思いだろう。やりたい、ということをやるとのこと。授業でも先生が何も話さない場面が多く、最初は戸惑った。自分たちで何を大切にしていこうか、ということ深く考える習慣を得た。」（西崎さん）、「山口先生は常に見守る立場で、やる人

は支えるし、やらない人はそのまま、という感じだった。」（森亮太さん）と、主体性が喚起される要因として、教員の姿勢が大きかったことが示された。私見や私情を重ねることが許していただけるなら、教育者中心ではなく学習者が中心となる教育プログラムが展開されていたことを時を経て確認することができ、存外の喜びであった。

3. 現地に吹いた風は土となったか？

この連載のタイトルにも掲げているが、今回の対話のテーマでは「風」と「土」の存在や役割を対置して取り上げた。文字通り、風はある土地に外から吹き込んでくるものであり、風が吹き抜けていくことで土地の質に影響がもたらされる、という概念である。風土論と言えば哲学者の和辻哲郎による研究がよく知られていることは論を待たないだろう。和辻（1962）によれば、風土とは「ある土地の気候、気象、地質、地味、地形、景観などの総称」（p.7）とされ、「人間は単に風土に規定されるのみでない、逆に人間が風土に働きかけてそれを変化する」（p.18）という記述を見出すことができる。²もっとも、本連載および分科会では、風と土を人の振る舞いの比喻として捉えているのだが、分科会の後段は、参加者から「風の人と土の人という対比で言えば、どんな風を吹かせたか。そして、これからはどう振る舞っていくか？」という問いが投げかけられ、順に以下のような語りが重ねられた。

森亮太さん：正直言って、どんな風だったかわからないですね。地域の人に聞いてみるしかわからないと思っています。自分がいい風をもたらせたかわからないものの、今、復興庁の地域実践型インターンシップのコーディネートをしていて、風のように学生が来るということは大事だと思っています。どうしても地域では人間関係が凝り固まる場所があるからです。サービス・ラーニングでは地域の活動に関わることで学生は学びがあるわけですが、地域にとっても新しい関わりを生み出すという面もあるでしょう。その点で、自分はまだ風かな、と思っています。なかなか土になれないですね。

土になった、と言えるのは結婚したときぐらいしかないのかもしれませんが。そもそも骨をうずめます、と言っても嘘っぽくなるでしょうし、結局はこの地域に関わっていく覚悟をするかしないか、そうした姿勢に表れるのではないのでしょうか。ただ、なかなかそこまでは至っていません。

森雄一朗さん：自分からすると土になりかけているのではないかと考えているんですが、周りから見ればまだ風でしかないという自覚があります。檜葉町に学生時代から風としてやってきて、今までのあいだで地域に対して出来たことは思い出づくりだと思っています。それが日々の生活の上での張りになるのではないかと感じています。というのも、檜葉町が避難指示から解除されて1年を迎える2016年9月4日に住民の方々とバーベキューをしたのですが、お礼の色紙を作成して次の日にプレゼントとしてお渡ししたところ、それを今でも大事に壁に飾られて大事にさせていただいているんです。部屋の模様替えをしても、ずっと掲げ続けていただいている、お伺いするたびに当時のことが話題になります。その時は前年度の受講生の経験をもとに参加型学習を支援する教育サポーターと「そよ風届け隊」のメンバーという両方の立場がありましたが、現地の方にとっては1学生です。そして今、住んでいるまちで学生時代にそうした出来事に一緒に関わることができたのがありがたいなと思っています。

大学を卒業して、半年だけですが地元で就職して、その後で学生時代に多くの思い出をつくることのできた檜葉に来たわけですが、私も正直、腹をくくって、檜葉に骨をうずめます、とは言えないと思っています。減災Pがきっかけで檜葉に住むことが予想できなかったように、たぶん、今後も予想できないことが出てくると思うので、なかなか断言は出来ません。ただ、逆に土になりすぎてしまうのもどうか、と考えるところもあります。というのも、地元の昔からの人間関係を考えなくても動けることが、「風」出身で土になりかけている上で自分の強みだと感じているからです。これからも、もう

少しそういう部分を出していけるといいなと思っています。ただ、まだもう少し檜葉で仕事をさせてもらいたいので、風として次どこに行くか、ということは考えていません。

西崎芽衣さん：私も自分ではどんな風か、ということとはわかりません。ただ、その後来ている学生さんたちの動きを見ると、何かのきっかけは作れていると思っています。先ほど亮太さんから「結婚くらいしか」という話が出ましたが、風か土か問われたら、今こちらで結婚したので、どちらかと言うと土かもしれない。実際、結婚したことでこの地域が地元になって、新たに親類となった方々の中には芽衣という私の名前を知らない人も出てきています。良い悪いという意味ではなく、奥さん、嫁さん、と呼ぶ人も出てきたことを考えると、土になってきた実感があります。

結婚して変わったのは周りからの名前への呼ばれ方だけではありません。今、育休中で、平日の昼間に家にいることが増えたのですが、そうすると畑仕事など、まちの暮らしを見る時間が増えました。それで、やっと檜葉に暮らしている感覚が芽生えてきた気がしています。また、結婚して「腰を据えてここに骨を埋める気ですか」など、言わば土の人になるんですか、と問われることも増えたものの、まだ風になる選択肢は持っていたいと家族で話をしています。

こうして話題提供者の3名からの語りに続いて、西崎さんのパートナーの松本昌弘さんから、次のようなコメントが添えられた。³風か土かという問いに対して、改めて学生と地域、現場と地元といった関係性を問い直す新たな選択肢が提示されたと捉えられる。

松本昌弘：3人がもたらした風は何だったのか、ということを考えていたのですが、そもそも自分もこの場所で生まれ育ったから土か、というところではないと思っています。土でも風でもなく、できれば波みたいな存在になりたいと思っています。波に満ち引きがあるように、地域にうねりを作れるような感じで、ここで生活していきたい、ということです。

先ほど「まだ風になる選択肢」と芽衣が言いましたが、生活や仕事の場所を選択するの上では、ここに一生住む、といったものではなく、誰とどこで何をしていくか、ということが重要じゃないかと思っています。

実際、この3人が檜葉に関わり始めたのはサービス・ラーニングがきっかけだったかもしれませんが、森亮太くんが言ったとおり、学生が学んでいる姿や地域に関わる活動を通じて地元の人間も学ばせていただいている、という感覚がありました。ですので、学生だから、地元だから、風だから、土だから、ではなく、大事なはそのメンバーで何をやっていきたいか、どういった活動をしてここにいた証をつくっていくか、ということが重要だと思ってきました。東日本大震災の原発事故により檜葉は地震発生の翌日から政府の避難指示により4年半にわたって誰も住むことができませんでした。森雄一朗くんから昔の一コマとして5年前のバーベキュー、その後の色紙、そしてそれを今も飾ってくれていること、それらが紹介されましたが、そうして関わっていった人がどんな風だったかということよりも、田舎のまちに若い人が来てくれて住んでいる人たちの人生の一コマになれたということの方が、町外からの受入を担当した者としてではなく、一緒に活動してきた仲間として重要だと思っています。

4. 共通体験が差異の顕在化をもたらす

今回、「風」と「土」との対比のもとで、サービス・ラーニングの受講から一定年数が経過した後に自らの経験を互いに語り合う場面を設けたことで明らかになったことは、風となって現地に赴いた人々は風を吹かせて土質を「変える」ことを意識しておらず、土の側で受け止めた人々は吹きついてきた風に必死に抗うのでも無抵抗に受け入れるのでもなかった、ということである。これは、積極的に問題解決を目的しないサービス・ラーニングという参加型学習の形態が奏功した点として位置づけられるのではなからうか。むしろ、年齢・性別・居住地はもとより、それぞれが置かれた境遇の違いを尊重しながら出会い、混ざり合うことが重要であることが確認できる。少なくとも出会いがすれ違

いに終わらなかった3人の受講生は、頻りに互いに生活圏・文化圏を越境し、結果として共に暮らす、働く、支え合う仲間どうしの信頼関係を築き上げてきた。

青山学院大学の香川秀太先生は、看護の現場などの実践的研究をもとに、越境によって新たな知が創造されることを学習心理学の観点から接近している。例えば「6段階からなる越境過程モデル」(香川・青山, 2015, pp.59-60)では、まず互いの領域へと行き交うと「自文化の前提やそれまでの文化的振る舞いが揺さぶられる」が、そうした動揺や抵抗を経るからこそ、異文化を受け入れた上で新たなアイデアが生まれることを示している。そして、その段階を経ることにより、新たな知を自らのコミュニティや状況への浸透がもたらされると共に、その後も多様な人々との対話が拡がり、新たな越境への構えも整うと説いている。こうした構図のもと、「異なるコミュニティの人びとが出会い、交流し、互いの重なりや共有部分を創出する一方で、文化的、歴史的に生じた互いの差異を単純に解消すべき悪者とするのではなく、むしろ変化の重要な原動力として生かす実践」(香川・青山, 2015, p.3)としての「越境的対話」が実現すると述べている。

今回、当時の担当教員である筆者と受講生、そして現場の受入担当となった方が、Zoomにより公開企画として対話したこともまた、越境

的対話の機会として位置づけられるだろう。事実、今回の対話を通じて、風と土という二項に対して波という新たな観点を得ることができた。東北地方沿岸部で暮らす人々にとって、波という存在は、あの日あの時の津波を想起させるものもあただろう。しかし波という比喩が過去の否定的経験ではなく、自らの仕事と暮らしを積極的に構想・設計する手がかりとされたことは、土の人という側面も意識しつつある話題提供者の3人にもまた、自らの立ち居振る舞いを考える手がかりになっただろう。

今回、当時の現場での実践がもたらした学びと成長へのインパクトについて、当事者の語りをもとに越境という観点から迫った。今回、参加者からの感想として「土の人とぶつかる風ほこりになってしまおうという点で<そよ風>が大事」が寄せられたのだが、こうした言語表現は、教育実践の最中において得ることができると、活動と学習の双方を促進する要因となる。事実、そもそも直接的な体験を通じて学ぶサービス・ラーニングでは「豊かな言語表現が自己と他者に新たな世界を提示する」(山口, 2020)という点で、体験の言語化が重視されている。そこで次回はいかに言語化を促すか、フィールドワークの充実のためのデスクワークにおける学びの場の設計概念に迫っていく。

(gucci@fc.ritsumei.ac.jp)

【引用文献】

- 香川秀太・青山征彦(編). 2015. 越境する対話と学び——異質な人・組織・コミュニティをつなぐ. 新曜社.
 藤田正勝. 2003. 和辻哲郎「風土」論の可能性と問題性. 日本哲学史研究 (京都大学大学院文学研究科日本哲学史研究室紀要) 1, 1-15.
 山口洋典・河井亨. 2016. サービス・ラーニングによる集団的な教育実践における学習評価と実践評価のあり方. 京都大学高等教育研究 22, 43-54.
 山口洋典. 2020. 地域参加型学習において言語化を促進する意味とその方途. 立命館言語文化研究 31(3), 73-87.
 和辻哲郎. 1962. 風土. 和辻哲郎全集〈第8巻〉風土, イタリア古寺巡礼 (pp.1-256). 岩波書店

【注】

- 1 シラバスで予め提示されていた到達目標に即して受講前と現在、そして今後の自らのあり方について記述するA3版の用紙で、山口・河井(2016)では、当該受講生の許可を得て、記入者の名前等に画像処理を付した上で紹介している。
- 2 和辻哲郎による風土論については、今回引用した全集第8巻の谷川徹三による解説はもとより、1986年に日本倫理学会の和辻賞を受賞している藤田(2003)の論考が参考になる。そこでは和辻哲郎が風土論を展開するきっかけがベルリン滞在中にハイデガーの『存在と時間』を手にしたことにある点などに触れ、風土とは「人間が自分の外へと出、そこにおいて自己を見出し、自己が何であるかを了解すること、あるいはそのことを可能にする場」(藤田, 2003, p.5)という解釈を提示している。
- 3 松本昌弘さんは本連載の第15回・第16回で触れた「そよ風届け隊」の現地での活動にあたり、榎葉町役場の復興推進課の担当として各種事業の調整役を担った。そのため、今回の話題提供者の3人がどのような風として地域に吹き抜けたかについてコメントできる立場にあることをここに記しておく。ただし、今回文字起こしした語りの内容からも明らかのように、分科会での発言は榎葉町役場の職員という立場としての見解ではなく、地元生まれ地元育ちの身として、町外から駆けつけた人々にどう向き合ったのかという観点からの率直な思いに基づくものとして捉えていただきたい。